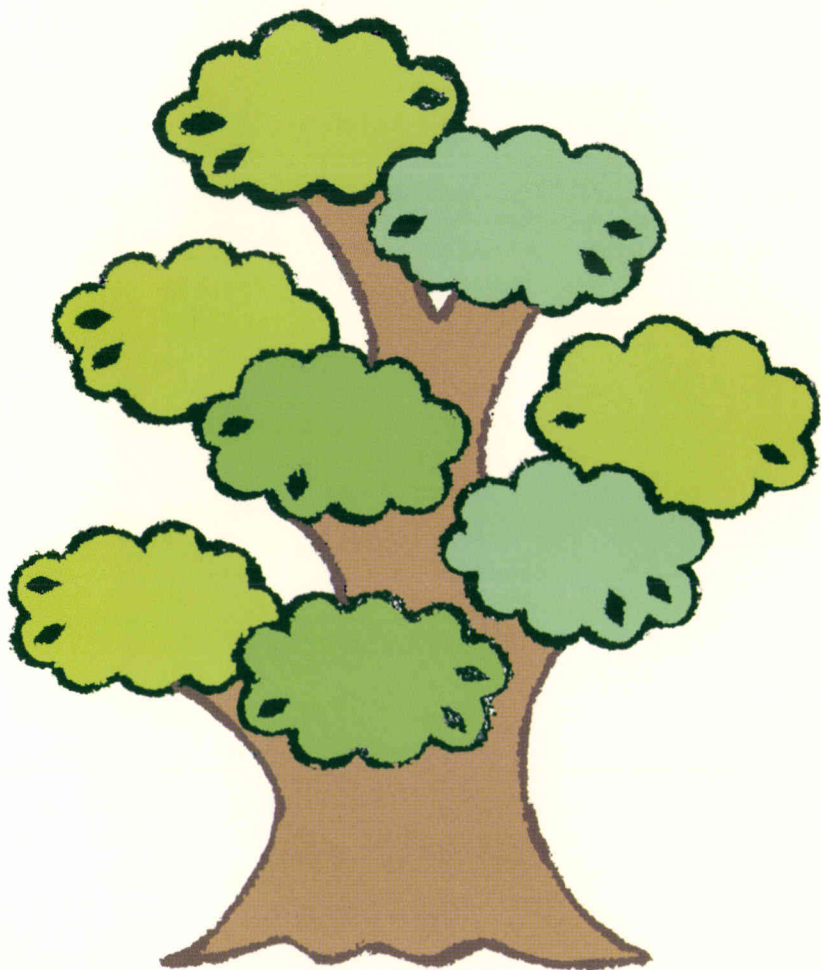


神の民  
LAOS講座 第3号



# 真理を求めて

— キリスト教の教理と信条 —



日本福音ルーテル教会



# 神の民 LAOSの樹

## ⑧「世界」の中のキリスト者

家庭と職業への召命  
キリスト者と生命倫理  
キリスト者と社会問題  
人権・正義・平和・環境保全  
情報化/グローバル化

## ⑦宣教と奉仕の理論と実際

教会は「宣教共同体」  
神の民・「信徒と教職」  
宣教と奉仕の具体像  
牧会的カウンセリング  
教会のディアコニア

## ⑥信仰継承

旧約聖書に見る信仰継承  
小児洗礼と親・教保・教会の役割  
堅信教育モデル  
教育カリキュラム  
祖先と死者の記念

## ③教理問答・諸信条

小教理問答書の展開  
アウグスブルク信仰告白  
ニケア信条と教会再一致  
義認の教理とルーテル教会  
日本の社会・文化の中で  
信仰を告白すること

## ⑤教会の歴史

初代教会の歴史  
宗教改革の展開  
現代教会の流れ  
JELCの歴史  
自分の教会の歩み

## ②説教の聴き方・語り方

聖書日課(バコハ)の意味  
説教の主題発見  
説教の構成と表現  
霊的な奉仕への召命  
説教の展開としての牧会

## ①礼拝の意味と実践

教会は「礼拝共同体」  
教会の暦と礼拝  
礼拝と音楽・会堂建築  
式文の構成と会衆の参加  
公同礼拝の司式者の役割

## ④「聖書」とその読み方

「聖書」の読み方  
救いの歴史の道筋  
聖書の各書を読む  
聖書とその周辺  
「私」の聖書ノート

祈り・聖書

宣  
教  
共  
同  
体  
家  
庭  
と  
社  
会  
礼  
拝  
共  
同  
体



# も く じ

●はじめに	4
I. 教理とは何か — 学ぶことの意味	
1 真理	5
2 生きること・考えること	5
3 信条・教理問答とは	6
II. 教理のポイント — 『教理問答書』を手引きとして	
1 十戒 — 人間とは何か	9
2 使徒信条 — 神とは何か	16
3 主の祈り — 信仰とは何か	22
4 洗礼と聖餐 — 教会とは何か	26
III. 義認の教理 — 一番、肝心なこと	
1 宗教改革の三大原理	31
2 ルターが悩み迷い、そして発見したこと	35
3 信仰義認	39
1) 聖書	40
2) アウグスブルク信仰告白	41
3) 義認の教理に関する共同宣言	43
4 今日における意味	45

# LAOS 講座へのお招き

## 信徒としてよりよく生きるために共に成長していこう

### 信徒としての成長を

キリスト者として生きようと決心しました。それは、イエス・キリストを通して神さまから与えられた十字架と復活の福音を信じ、洗礼を受けて、教会の交わりの中に入れていただいたからです。求道者会、洗礼準備会での熱心な学び、兄弟姉妹に見守られながらの洗礼式でのあの感激を懐かしく思い出します。あの時言われた言葉、「洗礼はゴールではなく、スタートですよ」もまた忘れられません。しかし、その後の今日に至るまでの信仰の歩みを振り返るとき、聖書についても、信仰者としての教会と社会の中での生き方についても、もっともっと学びを深め、実践していきたいと思わないではいられません。—これは、多くの教会員の方々に共通する思いではないでしょうか。信徒としての成長、このことは自分自身にとっても、また教会にとっても、非常に大切なことです。

### ルーテル教会としての決心

私たちが属する日本福音ルーテル教会 (JELC) は、「福音に生き、社会に仕え、証しする」をスローガンとする、「JELC 宣教方策21」(パワーミッション21、略称 PM21) を2002年5月の総会で採択しました。福音に生かされて生きる。社会に仕え、そこに住む一人ひとりに仕える。十字架と復活の主イエス・キリストとその恵みとを大胆に証しする。そういう教会、そういう信徒になろうと教会全体で決意したのです。

全体教会の方策は、個々の教会で具体化されることではじめて実を結びますし、個々の教会でということは、一人ひとりの信徒が兄弟姉妹みなと共に手を携え、祈りを一つにしながら、実践していくことで本当の形をとります。「キリストがあなたがたの内に形づくられるまで」(ガラテヤ4:19)、その日までともどもに信徒として成長していきましょう。パウロはこうも言っています、「わたしは、既にそれを得たというわけではなく、既に完全な者になっているわけでもありません。何とかして捕らえようと努めているのです」(フィリピ3:12)。

## LAOS (ラオス) として

PM21の第二プロジェクト(P2)の目標は「証しし、奉仕する信徒になろう」です。そこで検討の結果、そのような信徒になっていくために、信徒としての受洗後の教育、生涯かけての成長のための教育のプログラムを用意しようということになりました。そして、それを「LAOS講座」と名づけました。LAOS(ラオス)、それは、新約聖書が書かれたギリシャ語で「神の民」(ラオス・セウー)という言葉の「民」という言葉です。わたしたちは神の民、信仰の共同体、礼拝共同体、宣教共同体です。そのなくてはならない一員です。この講座の特徴は、個々の信徒の内的、霊的成長というのに留まらず、むしろ共同体の中で、共同体と共に成長する教会的信仰また生き方を目指している点です。LAOSという言葉から英語の信徒 laity という言葉もできたのですが、この講座は信徒こそ教会の中心であり、教会そのものだという考えに貫かれています。

### 証しし、奉仕する信徒になる

「証しし、奉仕する信徒」になっていくためには、知的な学習をすればそれで十分なわけではありません。この「LAOS講座・第一期」でキリスト者としての基礎的な知識を習得したあと、さらに「第二期」で、より実践的な学びをして「証し」と「奉仕」を生きていく信徒へと成長していきましょう。そのためには、既存の書物から学ぶというだけでなく、実際にそのような生き方をしている兄弟姉妹からも積極的に学んでいきたいと願っています。

### 教会の輪の中で

「LAOS講座」の第一期の学びは別掲の「LAOSの樹」にそのカリキュラムが載っています。その冊子を継続してご購入いただき、教会の諸集会で、学びを進めていってください。成果を分かち合い、そこで得たものを生活の中で生かし、足腰の強い信徒になっていきましょう。

2006年5月

日本福音ルーテル教会宣教方策21 (PM21)  
プロジェクト2 (P2) 委員会

## はじめに

さあ、「教理」について学んでいきましょう。それも特にルーテル教会の立場を自覚しつつ学びます。目次をごらんください。三部構成になっています。

第I章では、まず「教理とは何か」を考えます。

第II章では、すべての時代すべての教会にとって、いわば信仰の目じるしともなってきた教えの数々を「教理のポイント」として学びます。具体的に言えば、「十戒」、「使徒信条」、「主の祈り」、そして「 sacrament（洗礼と聖餐）」について、ルターの『教理問答書』を手引きにしつつ学びます。

第III章では、ルーテル教会において、いや、すべての信仰において一番要となる考え方、すなわち「義認の教理」について学びます。まず、ルターによって始まった宗教改革運動の柱となった考え方（聖書原理、信仰義認、万人祭司の三大原理）について考えます。そして、その中でも最も肝心の「義認の教理」について、ルターの信仰体験をも具体的に振り返りつつ、集中して学ぶことにします。

さあ、はじめましょう。

# 1. 教理とは何か — 学ぶことの意味

## 1 真理

ヨハネ18:38

「わたしは真理について証しをするために生れ、そのためにこの世に来た」とイエスは言われました。するとそれを聞いたローマの総督ピラトは、こう言ったのです。「真理とは何か。」これは「ヨハネによる福音書」18章に記されているピラトによるイエスへの裁判の一場面ですが、「真理」とは何でしょうか。

ズバリ言いますと、「神は人間を救済する」、これがイエスが証しされた真理です。しかし、これではあまりにズバリと言いすぎで、実際はもう少しいろいろ説明する必要があります。「教理」とかそれをまとめた「信条（信仰告白文章）」というのは、キリスト教が考えているその真理をいろいろと説明したものです。説明ですから、少しややこしいところがあるかもしれません。しかし、大切です。

このテキストでは、まさにその「教理」について学びます。「教理」とは、もう一度言えば、キリスト教の根本的な考え（神は人間を救済する）を、整理しまとめ説明したものです。ですから、「教理」は聖書の教えをいくぶん論理化し推敲したものとも言えます。

## 2 生きること・考えること

とはいえ、言うまでもありませんが、「教理」は書物の中の単なる論理ではありません。信仰は、私たちが現実に生きているこの時代の中で、この世界の中で、この日々の生活の中で生きられるものです。ですから、あえて言ってみれば単に「信仰をもつ」と言うよりも「信仰を生きる」と言うべきです。生きている私たちが、生ける神と生き生きとした関係を持つ。と

言うよりも、神により、すでに私たちはその生きた関係の中に入れられているのですが、この関係を「命の泉」として、つまり根拠として生きる。具体的に言えば、私と同様生きている隣人と生き生きとした関係をきり結びながら、日々を生きる……、これが信仰です。信仰は生きるものなのです。

そして、そのためにこそ、この生きた信仰をますます深め味わい、ますます生きるためにこそ、神との関係をもう一度しっかりと振り返り掘り下げる営み、これが「教理」を学ぶということの意味です。

さて、そのために大事なことがあります。というのは、「教理」とはギリシア語でドグマ(Dogma)とありますが、この言葉は「考える(ドケイン)」という言葉に由来します。ですから「教理」は、それに関心をもって自分で考えることが大切です。昔から言われていることだからと誰かに強制されたり、丸暗記したりしても全く意味がありません。信仰は、マインドコントロールでもなければ、<sup>いかし</sup>鰻の頭を拝んでいるわけでもありません。自分の頭で少しずつでも考えることが大切です。一步一步でも構いません。しかし、きっとある時ふと腑に落ちることがあります。その時、なんだかとてもイエス・キリストが身近に感じられることでしょう。



### 3 信条・教理問答とは

「教理」とは、キリスト教の教えが整理されまとめられたものです。そして、キリスト教2000年の歴史の中で代々の信仰者は、そうした教えを深く吟味し、自らの信仰の中身として、ある時には自覚的にそれを他の人々に表明(告白)しました。これを「クレド(信条、信仰

告白文書)」といます。またそうした文章は、人がキリスト教に入信（洗礼）する際に、学習用のテキストとしても用いられてきました。これを「カテキスム（教理問答）」といます。

さて、ルーテル教会では、そうした数ある信条・信仰告白文章・教理問答、つまり教理を文章化したものの内でも、次の9つの信条を最も大切な信条として重んじてきました。

※「古典信条」は、「基本信条」、「エキュメニカル信条」とも呼ばれています。「使徒信条」は8世紀に成立しましたが、その原型となった「古ローマ信条」はすでに2世紀後半、洗礼のときに用いられています。「ニケア信条」は正式には「ニケア・コンスタンチノポリス信条」といい、4世紀に成立。「アタナシウス信条」は5世紀の終わりに成立。なお「古典信条」として5世紀に成立した「カルケドン信条」がありますが、ルーテル教会ではそれは内容的に「アタナシウス信条」に含まれていると理解しています。

※9つの信条は今日、『一致信条書（ルーテル教会信条集）』という題で一冊の本としてまとめられています。しかし、量的に辞書のようにぶ厚く、読み通すのはなかなか大変です。（47ページ参照）

1. 使徒信条
2. ニケア信条
3. アタナシウス信条
4. アウグスブルク信仰告白
5. アウグスブルク信仰告白弁証
6. シュマルカルデン条項
7. 小教理問答書
8. 大教理問答書
9. 和協信条

最初の3つは「古典信条」と言われ、全てのキリスト教会で共通して重んじられており、いわばキリスト教の目印です。

4番目以降のものは、16世紀、宗教改革運動の結果、ルーテル教会（福音主義教会）が誕生した際に、中心的な教理をまとめたものとして大切にされてきた信条の数々です。

さて、これら9つの文書の中で、ルターが1529年に出版した『大教理問答書』と『小教理問答書』は、キリスト教にとって一番肝心の教えが、コンパクトに、しかし過不足なく述べられています。

実は、ルターが宗教改革運動をすすめて、新しく福音主義教会（ルーテル教会）を形成しつつあるころ、人々の信仰上の混乱と無知にはひどいものがありました。当時、ルターたちは、し



「ルーテル教会信条集  
〈一致信条書〉」  
聖文舎発行  
¥26,000  
(教文館より再版準備中)

ばしば地方の諸教会を訪問したのですが、そこで目にしたのは、たとえば「使徒信条」を正しく言えない牧師たちの姿でした。ましてや、その牧師に教えを受けていた一般の信徒たちの信仰生活が、本当に形だけの惰性に陥っている場合もめずらしくはなかったのです。そこでルターは、キリスト教の基本的な教えを、少し系統だてて人々が学ぶ必要を痛感したのです。そこで書かれたのが、『大教理問答書』と『小教理問答書』でした。

前者は牧師のための本、後者は家庭で親がわが子に教えるためのテキストとして執筆されました。もちろん今日では、両者とも誰が読んでも益することの多い本です。『大教理問答書』の方が当然くわしく記されていますが、その扱われているテーマ、構成、内容は『小教理問答書』も同じです。

そこで、このテキストでは、そうしたルターの『教理問答書』で扱われている事項を参考に、それを手引きとして、キリスト教にとって最もポイントとなる考え（教理）を学んでゆくことにします。

### 〈話し合いのために〉

- ①あなたにとって「教理」とはどのようなものですか？
- ②私たちが「教理や信条」を大切にするのはなぜでしょう。
- ③キリスト教と他の宗教との違いを話し合ってみましょう。

## II. 教理のポイント — 『教理問答書』を手引きとして

『教理問答書』では、次のような事項が扱われています。

- ①十戒
- ②使徒信条
- ③主の祈り
- ④洗礼と聖餐

以下、順番に学んでゆきます。

### 1 十戒 — 人間とは何か

出エジプト20：2-17  
申命5：6-21

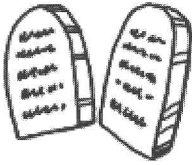


「十戒」は、その昔（B.C.13世紀）イスラエルの民を代表して、いや全人類を代表して、モーセが神からいただいた10の約束です。

事のいきさつは、こうです。イスラエルの民はカナン（パレスチナ）にいましたが、飢饉のためエジプトに移り住みました。初めのころはエジプトとの関係も良かったのですが、やがてエジプトの王（ファラオ）によって奴隷状態に置かれてしまいます。そこでイスラエルの民は、モーセを指導者として、紅海を渡り、エジプトを脱出しました。これが出エジプトです。

やっとの思いでシナイ半島にたどり着いた彼らでしたが、すぐにはカナンの地に住むことはできませんでした。そして結局は、なんと40年間もシナイの荒野で放浪生活を続けねばならなかったのです。これを「荒野の40年」と言います。苦しい日々でした。ともすると心がくじけ、生活がすさみ、神を忘れそうになりました。そんな時、神はモーセをシナイ山に呼び寄せ、10の約束を与えたのです。神は、必ずイスラエルの民を守りぬくと約束してくださったのです。そのための、人間としてどうしても守る

べき生き方、それを10の約束にまとめて与えてくださったのです。これが「十戒」です。



約束（契約）は一人では成り立ちません。必ず相手があります。つまり、約束が成り立つには、必ずそこに関係というものがあるのです。では、10の約束と言った場合、そこにはどんな関係が書いてあるのでしょうか。

まず第一に、神と人との関係が書いてあります。そして第二に、人と人との関係が書いてあります。そして考えてみれば、人間とはつまるところ、神と人との関係の中で、そして人と人との関係の中で生きている存在ですから、この「十戒」とは要するに、人間とは何か、人間とはいかなる存在なのか、が書いてあると言ってもよいわけです。

ですから「十戒」とは、いわゆる戒律と言うよりも、神が人間に与えてくださった「人間の定義」なのです。あなたたち人間を私はこういう存在として造ったのだよ、と神が10の項目にまとめて定義してくださったのです。

そして大事なことは、前半が土台となって後半が成立しているということです。ここがポイントです。神と人間との関係が土台となって、その上で人間と人間との関係も成り立っているのです。つまり、倫理（人と人との関係）が本当に倫理として成り立つためには、その土台に信仰（神と人との関係）の世界がなければならないのです。

たとえば、ひところ少年犯罪の増加と関連して「なぜ人を殺してはいけないのか」という問いがおおいに話題になりました。倫理の問題です。そこで多くの倫理学者や哲学者が答えを出そうといろいろ試みましたが、決定打がないの

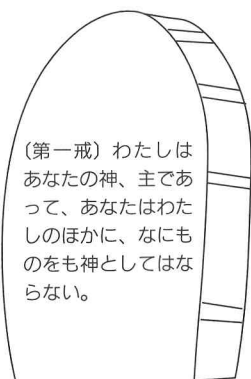
です。「君が死にたくないように、誰も死にたくはない。だから人を殺してはいけない」と倫理学者は答えました。ところが自殺志願者は言うのです、「私は死にたい…」。倫理の問題は、倫理の世界だけでは答えが出ない。人と人との関係、つまり倫理の世界のその土台に、実は神と人との関係、つまり宗教（信仰）の世界が存在しているからです。倫理の問いに対しては、根本的に宗教を土台にして答える他ないのです。

ですからルターは『小教理問答書』の中で「十戒」について説明をするとき、それが「殺してはいけない」とか「姦淫してはいけない」といった倫理上の問題についての解説であっても、まず開口一番、判で押したように「私どもは、神を恐れ愛さなくてはなりません」と答えただで、倫理問題について解説をしているのです。まず、神との関係がある。その上に、人と人との関係が生まれるのです。

さて、具体的に「十戒」について考えていきましょう。

**第一戒** 唯一神の教え、偶像禁止の教えです。ルターは、この教えについて『小教理問答書』で、次のように説明しています。「私どもは、なにものにもまして、神を恐れ、愛し、信頼しなければなりません」。

神を信頼すること、全てはこれに尽きます。神はこの私を守ってくださる、助けてくださる、救ってくださる。だからその神から私は離れることなどできない、できるはずもない。これが信頼です。これを別の言葉で言えば、神を

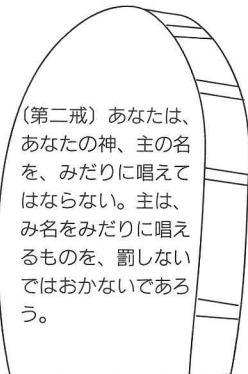


神として、神以外のものを神としない、ということ。神を神とすること、そこには何か神に対する近づきたい畏れ（おそ）の感覚が伴うことでしょう。しかも、その神が私を守ってくださるということ、そこに神といつもともにいたいという愛の感覚が自ずと生ずるのです。神に対する畏れと愛です。これを普通「信仰」と呼んでいます。要するに神への信頼ということなのです。

しかし、私たちは、時として何か別のものに信頼を寄せ、それを支えに生きていこうとします。お金やイデオロギー（思想）、民族、名誉、あるいは家族、自分の信念、偏差値や学歴、業績、人柄…など。これらは確かにある場合、大切なものではあります。神ではありません。もし、これらに究極の信頼を寄せるなら、それはその人にとって偶像になってしまいます。しかし、偶像は神ではありませんし、私を救ってもくれないでしょう。

**第二戒** これは神名の尊厳の教えです。名は体を表す。あるものを大切にするときには、その名をも粗末には扱わない。ですから神の名を粗末に軽々しく扱ってはならないのです。心を込めて接するべきです。

ところが私たちは、しばしば神の名を大切に扱うどころか、結局は自分の利益のために、逆に神の名を利用してしまうことがある。たとえば戦争を始めるとき、指導者は必ず神の名を口にし、信仰深かけに振舞いつつ、人々を戦争に狩り出します。そこで人々は、人殺しに過ぎないものを「聖戦」と思い込んだりもするので。しかし、これこそ神の名をみだりに唱えて



(第二戒) あなたは、あなたの神、主の名を、みだりに唱えてはならない。主は、み名をみだりに唱えるものを、罰しないではおかないであろう。

いることに他なりません。

ルターも言うように、神の名は、本当に困っているとき、また本当に感謝しているとき、心を込めて口にすべきです。神はその声にじっと耳を澄ましておられます。



**第三戒** 安息日（礼拝の日）の規定です。これは言うまでもなく、神が天地万物を創造された時、最後の七日目に休息をされたことに倣<sup>なら</sup>って、人間も一週間に一度、休息をとることにしたのです。

しかし、休息とは何でしょう。もちろん体の休息もあります。しかし、あえて言えば、魂の休息がもっと大事です。魂の休息、それは魂に平安を与え栄養をたっぷりと取ることです。それはいかにして可能か。神から平安をいただき、栄養をいただくことです。そして、そのためにこそ、週に一度、礼拝の日が決められているのです。なぜなら礼拝とは、神から魂の平安と栄養をいただくときだからです。それゆえルターは、この第三戒を次のように説明しています。「私どもは、神のみことばや説教を軽んじないで、むしろこれをきよいものとして、喜んできき、また学ばねばなりません。」

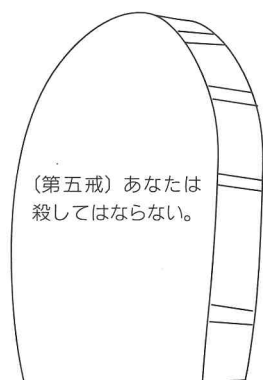


**第四戒** 親を大切にすること。これは自然に考えてみて当然のことです。親はこの私を産み育ててくれたのです。今日の私があるのも、親のお陰です。ですから、父と母を敬うことは、ごく自然なことと言えます。

しかし、実はそれ以上のことがあります。実は親は、この私の命というものを神から託されて、この私に送り届けてくれた「神の代理」で

もあるのです。つまり親は、言ってみれば「神の代理人」です。だから敬わなければならない。

このことは逆から考えれば、親の責任がいかに重いか、ということです。神の代理人なので、親は子どもを大切に育てなければならないのです。

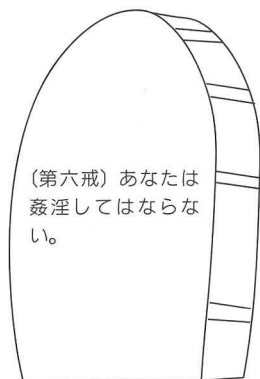


**第五戒** 前項の第四戒は、親の問題でした。そして、親とは単に人間の中の一人と言うにとどまらず、私にとって「神の代理人」でもありました。ですから親の問題は「十戒」全体からながめてみれば、ちょうど神に関わる問題と人に関わる問題の中間点にあることになるのです。

と言うわけで、第五戒以降は、人と人との関係を扱うこととなります。つまり倫理の問題です。

さて、第五戒は殺人の禁止です。先に「なぜ人を殺してはいけないのか」について少し考えてみました。そして、倫理学上ではなかなか答えがでないことに気がきました。つまり、人と人との関係だけで考えていては答えが出ないのです。では、どうしたらいいか。まず、神と人との関係をよく考えてみなければならない。すると案外と答えは簡単です。と言うのは、人間の命は神がつくり、そしてこの私に贈ってくださったもの、神がこの私にこの地上の命を託して与えてくださったものなのです。ですから、命とは厳密に言えば神のものなのです。人間が自分勝手に扱ってはならないのです。神の贈りものとして、地上の命はどんなものであれ大切にしなければなりません。つまり、殺してはいけ

ないのです。



(第六戒) あなたは  
姦淫してはなら  
ない。

**第六戒** 姦淫の禁止です。姦淫についても、先の殺人についてと同じことが言えます。ある人々は、自分の命や体は自分のものだから、どう扱ってもどんな生き方をしても、自分の自由と言うかもしれません。しかし、これはとんでもない思い違いです。私たちの命も体も魂も、これらは全て、神が私たちに託し、与えてくださったものなのです。ですから、体も魂も大切に扱い、品位をもって生きなければならない。ルターはこう言っています。「私どもは、ことばにおいても、行いにおいてもきよく正しく生き、また夫婦は互いに愛し、うやまいあわねばなりません。」



(第七戒) あなたは  
盗んではなら  
ない。

**第七戒** 盗みの禁止です。神は私たち一人ひとりに、命を、魂と体を、そして生活に必要なものを与えてくださった。一人ひとりに贈り与えてくださったのです。AさんにはAさんに必要なものを、BさんにはBさんに必要なものを、神は与えられたのです。だから隣人のものを盗んではならない。むしろ、お互いに困っているときは助け合うべきなのです。

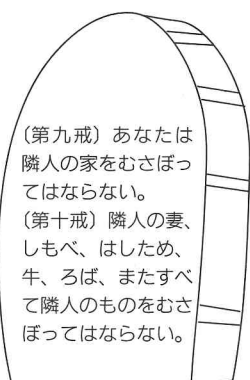


(第八戒) あなたは  
隣人について、偽証  
してはなら  
ない。

**第八戒** 嘘の禁止です。神は私たちに口と言葉を与えてくださった。これは嘘をつくためではありません。真理を語るために与えられたのです。

ところが、私たちの口からは、しばしば隣人への悪口が出てきます。しかし、悪口は真理の言葉ではありません。では、真理の言葉とはどんな言葉か。ルターはこう言っています。「隣

人を弁護し、ほめ、そして何でもよきに変える。」



**第九戒・第十戒** 貪欲(むさぼり)の禁止です。何度も繰り返しますが、神は一人ひとりに命を、魂と体を、そして生きるに必要なものを与えてくださった。ところが、わたしたちはそれを忘れます。そして、隣人のものを欲しがります。貪欲に欲しがります。そして貪欲には果てがない。やがて貪欲の地獄の虜になる。

しかし、立ち止まって考えてみるべきです。神が私に贈ってくださった一つひとつを、指をおって数えてみてください。もちろん指が何本あっても数え切れないぐらいに、神は私たち一人ひとりにたくさんのものを与えて下さっている。このことを冷静に考えてみれば、隣人のものをむさぼる貪欲の心は消えていくはずで

さて「十戒」とは、神が与えてくださった、「人間の定義」です。ですから、これらの約束をきちんと守るところに、人間の人間たる由縁ゆえんがあります。10の約束です。

ところで、イエス・キリストは、これらの10の約束を更に見事に2つの約束にまとめました。「心を尽くして、神を愛す」ということ、そしてもう一つ「隣人を自分のように愛す」ということです。つまり、神を信じること、そして人を愛すこと、この2つが「人間とは何か」という問いへの答えとなるのです。すなわち、この2つこそが「人間であること」の定義と言えるのです。

マタイ22：37-38

## 2 使徒信条 — 神とは何か

使徒信条は、キリスト教の最も基本となる最

重要な信条です。先にもふれたように、今日のような形になったのは8世紀ですが、その原型は、すでに2世紀の後半に成立しており、洗礼の際に用いられていたようです。キリスト教の教え（教理）の、いわばエキスがぎゅっとまとめられたような信条です。

では、どのような内容か？ ルターは次のように言っています。「神を徹底的に知ることを教えてくれる」（『大教理問答書』より）。つまり使徒信条には、神とは何かが説明されているのです。神とは何か。まさに私たちが最も知りたいことです。

神とは何か？ あえて一口で言ってみれば、神とは人間を「造り」、「救い」、そして「守る」方です。ここで「守る」と言ったのは、私たち人間にきよい生活をさせてくださるという意味です（これを聖化といいます）。したがって、使徒信条は三箇条に分けることができますが、ルターはこうまとめています。「（使徒信条において）父なる神についての第一条は創造を説き、御子（イエス・キリスト）についての第二条は救いを、聖霊についての第三条は聖化について説いているのである」（『大教理問答書』より）。

つまり、神は人間にとって、大きく言えば三つの働きをしてくさるのです。すなわち、私を造ってくださる（創造）、次に私を救ってくださる（救済）、そして私を守ってくださる（聖化）。そこで、創造の働きをなさるとき、私たちはその神を「父」と呼び、救済の働きをなさるとき、その神を「御子イエス・キリスト」と呼び、そして聖化の働きをなさるとき、その神を私たちは「聖霊」と呼んでいるのです。

このような、唯一の神が（父・御子・聖霊として）三つの働きをなさるといふ、このキリスト教独特の神についての教えを「三位一体論」といいます。そして、使徒信条はこうした神の三つの働きの一つひとつを、改めて簡潔に説明しているのです。

さて、具体的に使徒信条をみていきましょう。

（第一条）われは、天地の造り主・全能の父なる神を信ず。

### 第一条

1) 神は私を造ってくださった、私は神に造られたのです。だから「父なる神」です。しかも神は、私だけでなく、私に必要な全て（食べ物、着物、家、家族、仕事、財産などなど）も造ってくださる、つまり全能の神です。

2) なぜ神は、そこまでしてくださるのか。私に値打ちがあるからでしょうか。そうではありません。神は全く父としての慈悲（愛）の心から私を造ってくださったのです。つまり、全くの恵みそのものです。だから、私たちは神に感謝せずにはいられないのです。

（第二条）われは、そのひとり子、われらの主イエス・キリストを信ず。主は聖霊によりて宿り、おとめマリヤより生まれ、ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ、陰府に下り、三日目に死人のうちよりよみがえり、天に上り、全能の父なる神の右に坐したまえり、かしてより来たりたまいて、生ける人と死にたる人とを、さばきたまわん。

### 第二条

1) 神は私を造ってくださった。しかも、全く自由な存在として造ってくださったのです（つまり人間は神の操り人形ではないのです。人間には人間としての「主体性」こそが神によって与えられたのです）。と言うことは、人間は罪を犯す自由も持っている。そして残念ながら、人間は愚かにも実際、現実には罪を犯して生きています（私も、あなたも……）。

2) 罪に対しては当然、責任を負わねばなり

ません。つまり罰がある。ところが、この本来、人間が負わねばならない苦しい罰を、イエス・キリストが十字架の上で、人間に代って負ってくださった。十字架の上の代理の死です。その結果、人間は罰を受けることなく、その犯した罪が赦されることとなったのです。罪が赦された、つまり、人間はイエス・キリストの十字架の受難のゆえに救われたのです。これが人間の救済です。ありがたいことです。

3) しかし、なぜキリストはそんな事をなさるのか、またどうしてキリストにそんな力があるのか。もう一度、考えてみましょう。人間が罪を犯した。したがって人間が罰を受け責任を負わねばならない。ところが、他方、正直に言うとなんか人間は無力な存在で、自分の犯した罪の責任を負う力がないのです。罪を犯しつづける、この人間の罪の重さは、もはや人間ではどうすることもできないのです。つまり、人間でなく**神**にしか、その重い責任は担えないのです。

要するに、人間の罪の責任は、人間が負わねばならない。しかし、人間にはその力がなく、神しか負えない。と言うことで、人間の罪を負う存在は、一方で人間でなければならないし、同時に他方で神でなければならない。つまり、人間の罪を代理で負う存在とは、人間であってかつ神である存在である他ないのです。神は神でありながら人間存在となって、この世に生まれ（ですから「父なる神」に対して「子なる神」です）、そして十字架の上で人間に代って罪を負ってくださった。この方が他でもなくイエス・キリストです。ですからキリストは、「聖霊（神）によって宿り、おとめマリヤ（人間）より生まれた」、つまり「まことの神」で

第二条の最後のところに「さばき（審判）」という言葉が書いてありますが、今までの説明からもわかる通り、キリストのさばきは、狭い心の私たち人間が考えているような憎しみのさばきでなく、どこまでも慈愛にみちた「愛のさばき」にちがいません。

イエス・キリストが、「まことの神」（神性）であり「まことの人」（人性）であるという、この教えはキリスト教教理の最も大事な教えで、「キリスト両性論」といいます。

（第三条）われは聖霊を信ず。また聖なるキリスト教会・聖徒の交わり、罪のゆるし、からだのよみがえり、限りなきいのちを信ず、アーメン。

あり「まことの人」なのです。

そういう「まことの神・まことの人」であるイエス・キリストの犠牲の死によって、私たち人間の罪が赦され、救済されたのです。

また、そういう「まことの神・まことの人」であるゆえ、イエス・キリストは全ての死者の先駆け（初穂）として復活され、私たち人間の復活の道をも与えてくださるのです。すべての死者の復活の日、これがキリスト教でいう世の終り（完成）ですが、キリストはその完成（終末）の日をもたらししてくさるのです。

こうした神の、私たち一人ひとりを本当に大切にしてくさるやさしい御心（愛）に対し、人間に感謝以外の何があるでしょうか。

### 第三条

1) 神は人間に三つの姿を通して働きかけておられることについては、すでに述べました。まず、天におられる造り主（父なる神）として、次に、私たちと同じ地上で人間の姿の救い主（子なる神イエス・キリスト）として、そして第三に、目には見えないが私たちの守り主（聖霊なる神）として、神は人間に働きかけてくださるのです。

しかし、聖霊とは何でしょうか。霊とは、目には見えないが確かに働いている力のことです。ですから聖霊とは、聖なる神の力のことと言えます。

そして、実は人間はこうした神の三つの働きかけを通して、初めて本当に生きてゆけるのです。人間は生きてゆく（歩く）ためには、上からの声（この道を真っ直ぐ歩け、という父の声！）が必要です。しかし、それだけでは歩け

ません。人間には自分の弱さや悲しさをよくわかってくれる、いわば横に立って一緒に歩いてくれる存在が必要なのです。これが、私たちと共に地上を歩まれたイエス・キリストです。しかし、実は人間はそれでも本当は歩けない。本人が歩こうと自分で思わなければ歩けないからです。そこで神は目に見えぬ姿で（つまり霊として）私たちの内側に入りこんで、私たちの内から歩く（気）力を与えてくださる。これが聖霊なのです。つまり神は、私たちの上から（父）、私たちと同じ地平で共に（イエス・キリスト）、そして私たちの内から（聖霊）働きかけてくださるのです。このようにして人間は生きてゆくのです。

2) では、具体的に、聖霊はどのようにして、私たち人間を守ってくださるのでしょうか。イエス・キリストによって罪ゆるされた私たち人間に、聖霊はきよい生活をさせる、その力を与え続けることによって私たちを守ってくださるのです。人間にゆがみ曲がった生き方ではなく、真っ直ぐなきよい生活をさせてくださること、これを「聖化」といいます。つまり、聖霊は私たちを聖化してくださるのです。

より具体的に言えば、私たちを「教会」に集め、罪をゆるし、やがて時がきて、終りのときには神の下に復活させてくださる……そうした「永遠の命」に至る道をきよめ守ってくださるのが聖霊なる神なのです。

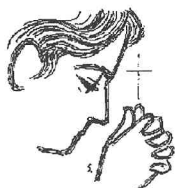
これで使徒信条の一応の説明を終わりますが、ルターは『大教理問答書』の中でこう語っています。「したがって、使徒信条をごく簡単にまとめると次の数語に帰するであろう。《私

は、私を造りたまひし父なる神を信じる。私は、私を救いたまひし子なる神を信じる。私は、私を清めたまひし聖霊なる神を信じる》)。

### 3 主の祈り — 信仰とは何か

マタイ6：9-13

ルカ11：1-4



「主の祈り」は、イエス・キリストが弟子たちに自ら教えた祈りです。よく、どのように祈ればよいのかと質問する人がいますが、答は簡単です。「主の祈り」を祈ればよいのです。「主の祈り」の一行一行をよくよく吟味して真心をこめて唱えてみれば、結局は私たちが心で切に祈りたい、祈るべきという事柄が全部そこに含まれていることに気がきます。さすがにイエスの教えてくださった祈りです。これ以上の祈りはないわけです。

そこで「主の祈り」について考えてみましょう。そして、合わせて「信仰」ということについても考えてみることにしましょう。

人間とは何かについて「十戒」を通して学びました。また、神とは何かについては「使徒信条」を通して学びました。では、そうした神と人間との関係はどうなっているのでしょうか。あるいはどうあるべきなのでしょう。

できるだけ、最も基本的なことだけを簡潔に考えてみます。神の働きは、人間を「造り」、「救い」、「守る」ことでした。その神に対して人間はどのように関わっているだろうか、あるいは関わるべきなのだろうか。人間は、そうした神の恵みに「感謝し」、自らの至らぬ点を「反省し(悔改め)」、困っていることを神に「願う」(自分のことばかりでなく、他者のことをも「とりなし願う」こともある)。つまり、私たち人間は神に、感謝・悔改め・願い・とり

なし、という関わり方をしているのです。そして、考えてみれば、これこそがまさに「祈り」の内容そのものではないでしょうか。

祈り祈られる関係、つまり「祈り」こそが神と人間との究極の関係なのです。そして、人が神に祈るといふこと、これが、とりもなおさず「信仰」ということではないでしょうか。「信仰」とは何かと問う人も多いのですが、「信仰」とは「祈る」ことなのです。祈るとき、その人は、まぎれもなく信仰者なのです。

もう一度、繰り返して言えば、人間は神に感謝し、悔改め、願い、とりなしを請う。つまり、祈る。そして祈ること、これが信仰であり、これが人間の神への究極の関わり方と言えます。それゆえ、ルターはこう言っているのです。「私たちの隠れ場、避難所は祈りの中にしかない」（『大教理問答書』より）。

さて、具体的に「主の祈り」を見ていきましょう。

天の父よ。

天にまします、われらの父よ。

上段 ~~~~~ NCC 統一訳  
下段 ~~~~~ 文語訳

### 祈りの第一行目

祈りの第一行目は、神への呼びかけです。

神は天におられる。もちろん、これは単純に神が銀河系のかなた、宇宙のどこかかなたにおられるということを意味しているではありません。神は、私たち人間が近づくにはあまりに尊すぎるお方だ、あまりに尊厳に満ちあふれている、ということ表現しているのです。つまり、神はあまりに尊すぎて、人間から最も遠いところ（天）におられる。

ところが、その最も遠い方が、実は最も近い。まるで自分の親（父）のように最も近い。

つまり、神は人間をわが子のように守り愛し抜く最も近いお方なのです。そこで神に対して「われらの父よ」と呼びかけるのです。

まことに神は私たち人間にとって、遠い（尊厳）、しかも近い（愛）。私たちは、そういう神に祈るのです。

み名があがめられますように。  
み国が来ますように。  
み心が天で行われるように、  
地上でも行われますように。

願わくは、み名をあがめさせたまえ。  
み国を来たらせたまえ。  
み心の天になるごとく、  
地にもなさせたまえ。

## 祈りの前半

1) 祈りの前半は、「み名」、「み国」、「み心」というように、神に関することです。神の名があがめられるように、神の国が来るように、神の心がこの地上にも実現するように、と祈るのです。まとめて言えば、神の栄光を祈るのです。もちろん、私たちがそんなことを祈らなくても神は栄光に満ちた方ですが、私たちが神の恵みを思えば感謝せずにはおられず、その気が神の栄光を祈らずにはおられないのです。

2) しかし、これらの祈りは単に私たちが神の栄光を祈っているだけではありません。神の名があがめられきよくされることは、そう祈る私たち自身がきよい生活ができますようにと願っているのです。神の国が来ること、神の心が地上に実現することは、私たち自身が、そうした神のきよい心が実現した世界に生きるのですから、まさにきよく生きたい私たち自身の切なる願いでもあるのです。

## 祈りの後半

1) 祈りの後半は、「われらの糧」、「われらの罪」、「われらにふりかかる試みや悪」というように人間に関することです。

さて、生きていくためには、日ごとの糧が必要です。ここで糧といっているのは、単に食物

私たちに今日もこの日の糧をお与えください。  
私たちに罪を犯した者を赦しましたから、私たちの犯した罪をお赦してください。  
私たちを誘惑から導き出して、悪からお救いください。

われらの日ごとの糧を今日も与えたまえ。  
われらに罪を犯すものを、われらがゆるすごとく、われらの罪をもゆるしたまえ。  
われらを試みに会わせず、悪より救い出したまえ。

のことだけではありません。「生活になくはならぬすべてのものを含む」とルターは説明し、次のような事柄を列挙しています。食物、着物、住宅、畑やお金、家族、政府、よい気候、平和、健康、教育、名誉、友人隣人、……。まさに生きていくのに必要な全てを神に願い祈るのです。切実な祈りです。

しかし、注目したいのは、それらを「今日も」与えてくださいと祈る点です。不必要なものまで欲しがらぬ貪欲や虚栄とは、この祈りは無縁です。本当に必要なものを願うのです。

2) 次に、「われらの罪をゆるしたまえ」と神に願います。罪多い私たちです。ですから素直に「ゆるしてください」と文字通り祈るべきです。

ところが、少し気になる事がこの言葉の前に出てきます。「われらに罪を犯すものを、われらがゆるすごとく」という言葉です。実は私たちは、なかなか人をゆるせません。ひょっとすると、人間は生涯に一度たりとも人を本当にゆるしたりできない存在かもしれません……。すると、人をゆるしていない私は、自分も神からゆるしてもらえない、だからこの祈りは祈れない……という風に考えてしまいます。しかし、そうではないのです。神は人間を全く無条件にゆるしてくださいました。その人が罪人だろうが、他の誰かをゆるしていなかろうが、そんなことは問わずに（全くとりひきなしに、全く無条件に）ゆるされるのです。しかし、だからこそ、無条件にゆるされた私たちは、他の人をもゆるすことが自分にもできますようにと神に願う心をもって、この言葉をあえて口に出して祈るのです。人をゆるす心を、この私に与えたま

えという気持をもって、この祈りをするのです。

3) 私たちにふりかかる様々な悪しき事柄(悪魔の誘惑や災いや悪)から守ってくださいと、私たちは素直に神様に祈るべきですし、祈ってよいのです。

み国も力も栄光も  
とこしえにあなたのも  
のだからです。  
アーメン。

国と力と栄えとは、限  
りなくなんじのものな  
ればなり。  
アーメン。

### 結びの言葉

結びの言葉です。「国と力と栄え」、つまり、全ては神のみ手のうちにあります、という賛美の言葉で、この「主の祈り」は終わります。

「アーメン」というのは、「本当です、その通りです」という意味のヘブライ語です。

これで「主の祈り」の解説は終わります。最後に再度、ルターの言葉を引用しておきましょう。「私たち自身が考えた祈りでは、心はいつも疑念につきまといわれて、『私は祈った、しかしそれが神のみ心になうかどうか、だれにわかるか』と言うであろう。だが、主の祈りは(イエスご自身が教えられた祈りだから)神はその祈りを喜んで聞いてくださるといふ、実にすばらしい保証がある。つまり、これ以上に尊い祈りはこの世になく、世の全ての富をもってしても代えられないものなのである」(『大教理問答書』より)。

## 4 洗礼と聖餐 — 教会とは何か

ルターの『大・小教理問答書』は、十戒、使徒信条、主の祈りと順番に扱ってきて、最後に洗礼と聖餐について解説をしています。そこで私たちも、今から洗礼と聖餐について考えていきますが、その前に、その前提ともなる「教会」というものについて考えておきましょう。

新約聖書の原語のギリシア語で、教会のことをエクレシアといいます。しかし、エクレシアという言葉はもともと「集まり」という程の意味です。

では「**教会** (エクレシア)」とは、どんな集まりなのでしょう。それは他の集まりと比較して、どんな特徴があるのでしょうか。昔から二つの事が言われてきました。「**使徒性**」と「**普遍性**」です。「**使徒性** (アポストロス)」とは、**教会**という集まりが、キリストそしてそのキリストの弟子 (使徒) の教えを正しく受け継いでいるという意味です。「**普遍性** (カトリコス)」とは、**教会**という集まりが「いつでも、どこでも、だれによってでも信じられる」、つまり、時代、地域、民族を越えて変わらないという意味です。ですからキリスト教は、もともととは、その発生がイスラエル民族の宗教であったものが、2000年の時代を越えて、パレスチナという地域を越えて、民族の壁も越えて、全世界に根をおろした、しかも『聖書』の教えを少しもあいまいにすることなく学び続ける宗教となっているのです。

では、**教会**というこの集まりは、具体的にどのように存在するのでしょうか。**教会**の具体的に目に見える姿、それは「**礼拝**」という形となって現われます。ですから**教会**という集まりの最大の特徴は、**礼拝**をするという点にあります。

では、**礼拝**とは何でしょうか。**礼拝**のことをドイツ語でゴttesディーンスト、英語でサービスといいます。いずれも奉仕という意味です。しかし、誰が誰に対して奉仕するのでしょうか。**礼拝**の時、生け贄をささげたり、お香を

たいたりして、人間が神に奉仕するのだと考えることもできます。しかし、ルターは、礼拝の本質にはもっと深い意味があると考えました。それは礼拝の時、実は人間が神に奉仕するのではなくて、むしろ逆に、神が人間に奉仕してくださる、サービスしてくださる、つまり恵みを与えてくださるというのです。神こそが人間に奉仕（サービス）する、だから礼拝（サービス）なのです。

では、どのような形で神は人間に奉仕してくださるのか。別の言葉で言えば、礼拝のとき、どのような形で神は人間に恵みを与えてくださるのか。宗教改革の時代にプロテスタント教会の旗印となった信仰宣言『アウグスブルク信仰告白』の第七条には、こう書いてあります。教会とは、「その中で福音が純粹に説教され、 sacrament が福音に従って与えられる」ところである。つまり、「説教」と「 sacrament （洗礼と聖餐）」という形で、神は人間に恵みを与えてくださる、サービスしてくださるのです。そこでルターは、「説教」と「 sacrament 」を二つの「教会のしるし」と呼んだのです。

説教と sacrament という形で神は人間にサービスして下さる。これは別の言葉で言えば、「説教」と「 sacrament 」を通して、私たち人間は救いの神と出会うということです。ですから「説教」は人間のするお話ではなく、人の口を通した「神の言葉」なのです。

さて、ここから元にもどって洗礼と聖餐について考えていきましょう。

**洗礼と聖餐**のことを「 sacrament 」といいます。日本語で秘跡とか聖礼典とか訳すこともありますが、何だかよくわからない訳語です。もともとは、聖書のギリシア語でミステリオン（秘密、奥義）という言葉のラテン語訳で sacrament という言葉が使われているのです。その意味するところは、本来、目に見えない神

(の力) の、不思議にも目に見える現われということで、まさに神の神秘・奥義、そこで sacrament と言うのです。伝統的に7つの sacrament があるとされてきましたが、ルターは、厳密に聖書に記述されている洗礼と聖餐の2つを sacrament としました。

目に見えない神の、目に見えるしるし。これが sacrament ですが、もう少し説明すると、人の罪をゆるそうという神のみ心（これを「神の言葉」といいます）は目に見えませんが、この神のみ心を体現するものとして、たとえば目に見える水がいわば人の罪を洗いきよめる。この罪を洗いきよめる儀式、これが洗礼という sacrament なのです。「目に見えない神のみ心（言葉）」プラス「目に見える物（水、パンとブドウ酒）」イコール「sacrament」なのです。したがって、この等式が成立するためには、そこにこの sacrament を受け取る側の「信じる心」が不可欠です。信じる心がなければ、洗礼で用いられる水も単なる水道の水と少しも変わる場所がありません。要するに、神のみ心（言葉）、それを受けとめる人の心（信仰）、これこそが、sacrament といわれる儀式の鍵です。



洗礼はその人が神にゆるされるための儀式ですから、それがキリスト教への入信の儀式となります。そこでしばしば洗礼が人の入信の決意のしるしと考えられたりもするのです。しかし、本来は、より根本的に言えば、洗礼は神の恵み（のしるし）です。

洗礼は神の恵みですから、それは幼児にも施されます（もちろん、その際、恵みを受けとる側の幼児の信仰は、その幼児に見合った幼児なりの信仰と言えます）。

神の、その人の罪をゆるそうという心は決して変わることがありませんから、神の恵みとしての洗礼は生涯に一度でよいのです。

さて、そこでまず「**洗礼**」について考えてみましょう。人間の罪をゆるそうという神の心が、洗礼の水となって、それを真心から信じる人の罪を洗いきよめるのです。つまり罪のゆるし、これが洗礼です。ですから、洗礼は人の罪をゆるそうという全くの神の恵みですから、洗礼とは言うなれば、「神の恵み」のしるしです。

次に「**聖餐**」について考えましょう。聖餐の

※初陪餐について—

幼児洗礼を受けた子どもは、だいたい学齢期のころ、聖餐にあずかります。配られるパンやブドウ酒を特別なもの（キリストの体と血）であることをある意味で理解できるようになるからです。

※堅信礼—サクラメントではありませんが、幼児洗礼を受けた人が、子どもの信仰を脱して自らの信仰を自覚的に見つめ直して、そうすることによって自らの信仰を堅め直す儀式です。

なお、大人の洗礼（成人洗礼）の場合には、神の恵みとしての「洗礼」と、その神の恵みへの人の応答としての「堅信礼」とが、同じ一つの儀式としておこなわれることが多いです。

起源はもちろん「最後の晚餐」にあります。最後の晚餐のとき、イエス・キリストは弟子たちにパンとブドウ酒を渡しつつ、それを「わたしの体」、「わたしの血」とであるとされました。そして、それを食することで、キリストと共に生きていくのだと言われたのです。このキリストの言葉（神の心）に基づいて、聖餐式でパンとブドウ酒が配られるのです。つまり、この時この聖餐において、パン（体）とブドウ酒（血）という形で、現実にイエス・キリストがここにおられ、そのキリストと共に私たちは現実に生きていくのだと、聖餐を受ける者は信じるのです（聖餐のパンとブドウ酒においてキリストが現実に存在（臨在）するというこの教えを「キリストの現在（現臨、リアルプレゼンス）」といいます）。生涯にわたって繰り返し繰り返し、私たちは聖餐式でパンとブドウ酒をいただき、キリストと共に生きていくのです。



### 〈話し合いのために〉

- ① 礼拝の中で使徒信条や主の祈りをどのような気持ちで唱えますか。
- ② 十戒を現代社会の中で受け止めて生きるために、私たちにできることは何でしょうか。
- ③ 神様の愛は洗礼と聖餐を通してどのように表わされていますか。

### Ⅲ. 義認の教理 — 一番、肝心なこと

#### 1 宗教改革の三大原理

ルーテル教会は、16世紀のドイツでマルティン・ルターが起した宗教改革運動を源とする教会です。それまで教会（ローマ・カトリック教会）は人々の信仰を支え守ってきましたが、なにごと長い年月の間には様々な<sup>ほころ</sup>綻びや<sup>ゆが</sup>歪みがどうしても生じるものです。それに対してルターは、もう一度、信仰の原点に立って改革の運動をすすめました。

ルターが改革をすすめる時、その原動力となったのが「信仰義認」という考え方です。つまり、ルーテル教会にとって（そして今や、カトリック、プロテスタントを問わず全てのキリスト教会にとって）、一番、肝心な教え、それが「義認の教理」です。そのことを、この第3章では学びます。

しかし、その前にまず、その信仰義認の教えをもその内を含む、いわゆる宗教改革の三大原理といわれている事柄を考えてみることにしましょう。宗教改革の三大原理とは、次の三つです。

①聖書原理（聖書のみ）

②信仰義認（信仰のみ）

③万人祭司（全信徒祭司とも言う）

いずれも大切な教えですが、やや誤解して理解されていることも多いようです。順番に考えていきましょう。

1. まず**聖書原理**です。神のことや人間のことを考えるとき、何を土台に考えた方がいいのか。先ほどふれたように、中世の教会では長い年月の間にいろいろな歪みもでてきたのです

が、信仰の土台として、人間が積み重ねてきた「伝統」というもの（たとえば代々の教皇や教会法といった伝承）が最重要なものとして考えられたりもしました。それに対してルターは、「聖書のみ」、つまり物事を考えるとき、人間のアレコレの伝承ではなく、聖書という原点に帰れと言ったのです。これが聖書原理ということ です。「聖書のみ」です。

しかし、この「聖書のみ」は、ともすると、しばしば誤解されています。聖書に書いてある一文字一文字にいわば迷信的に、自らの（神からいただいた）理性を使うことなくやみくもに従うという誤解です。聖書を読むときは、頭を使わなくては いけません。聖書を本当に尊重するからこそ、代々の人類の残してくれた遺産（書物や思想）をも参照しつつ、頭をも含めて全身全霊で聖書を読むのです。

要するに聖書原理（聖書のみ）とは、自分勝手な（伝統をも含めた）人間の思いで聖書を理解するのではなく、聖書が私たちに一番語りかけたいこと（聖書の中心）をよく考えつつ聖書に聴き従うということなのです。

2. 第二番目は**信仰義認**です。このことについては後でより詳しく説明しますが、ここではまずその考え方の輪郭を考えておきましょう。

長い年月の間に人々は知らず知らずのうちに、自分の根元を神に置くのではなく、自分の力というものを過信して、自分の力（たとえば自分の立派なよき行為）によって自らの救いを獲得しようという傾向に陥っていました。よき行為によって、神に**義しい者**であると認められ救いに入る、というわけです。これを行為義認と

人間は信仰を通して神から義しい者と認められ救いに入れられるのです。これを信仰義認といますが、こうした義認の考え方をルターは主張したのです。ですから「信仰のみ」です。

いいます。

しかし、それは間違いではないかとルターは考えました（実はそれが間違いであることは、すでに聖書の中でパウロも、あるいはのちにアウグスティヌスも言っていたのです）。人間の救いは、神に根元を置いて神により頼む、つまり「信仰のみ」によって神からいただくものなのです。

さて、こういうわけで、この「信仰のみ」、つまり信仰義認の考え方が、宗教改革運動でプロテスタント教会の旗印となりました。しかし、この「信仰のみ」ということも、また様々な誤解にさらされました。一つは「信仰のみ」ということで、人間の理性を（それも神からいただいたものにもかかわらず）否定して、いわゆる「<sup>いわし</sup>鰯の頭も信心から」といったようなわけもわからず信じ込むことのすすめと考えてしまう誤解です。鰯の頭はいくら信仰しても鰯の頭です。いくら「信仰のみ」だからと言っても、鰯の頭を信仰しては、人は決して救われません。

もう一つの誤解は、人が救われるのは「信仰のみ」ということであるので、人間が「よき行為」をすることは無意味であるという考え方です。善行はいらない、正しく生きることはつまらない、人間は「信仰のみ」でよい、というのです。しかし、これもとんでもない間違いです。神に無条件に罪ゆるされて義しい者と認められ、救いを約束された者が、どうして他の人々に親切（善行）をせずにいられるでしょうか。よき行為は、信仰の果実です。「信仰のみ」と「よき行為」は矛盾しません。むしろワンセットです。しかし、これらについては更に後で

考えることにします。

3. 宗教改革三大原理の第三番目は**万人祭司** (**全信徒祭司**) です。さて、これまた中世の長い年月の間に、神の事柄が祭司 (聖職者) たちにあなたまかせの状態になっていました。祭司という言葉はそもそも何を意味するかと言うと、神の前に直接立つことをゆるされた者ということです。ところが、信仰があなたまかせになると、信仰の事柄は何でもかんでも祭司にたのんでおけば事足りるという風になってしまいます。また祭司たちも、神の前に立つことができるのは苦しい修業を耐えた自分たちだけの特権であると勘違いして、人々に対して権威や権力を振り回していました。そして、そこに教皇庁や聖職者たちの腐敗の原因もあったのです。

しかし考えてみれば、神との関係や自分の生き方や救いの問題は、決して誰かにあなたまかせではいけないはずです。信じる者一人ひとりが自分の問題として受けとめ、一人ひとりが直接神の前に立つべきなのです。一人ひとりが神の前に立つ責任がありますし、また立つことがゆるされているのです。つまり、一人ひとりが神の前に立つ祭司なのです。万人が祭司なのです。その人が神殿に務める祭司でなく、たとえ靴屋さんでも、八百屋さんでも、神の前に立つ限り、その人は祭司です。つまり、神の前に立つことは万人の責任ですし、権利でもあるのです。ルターは当時の、聖職者の特権ばかりが振り回される教会制度を、こうした万人に神の前に立つ責任と権利があるという考え方に基づいて厳しく批判しました。これが万人祭司 (全信徒祭司) ということです。

ところで、この万人祭司の考え方にも誤解が生じがちです。この万人祭司というのは、一人ひとりがいわば祭司のように神の前に立つ責任と権利があるということであって、一人ひとりが全員、実際に祭司（聖職者）になるということではありません。神に仕える専門の務めとしては、やはり現実問題として専門の祭司（今日的に言えば神父や牧師）が必要でしょう。その祭司は教会の中心となって、教会の務めを果します。ですから信徒の一人ひとりとは、この世で自分に与えられた務め（職業）を果しつつ、祭司を支え助け、しかも自分の足でしっかり立って神の前で生きてゆくのです。すなわち、万人祭司とは、万人が現実的に祭司であるという制度ではなく、万人が神の前に立つという祭司性（全信徒祭司性）をもつことなのです。

## 2 ルターが悩み迷い、そして発見したこと

ルーテル教会の教理の中心、それは信仰義認です。そこでよく義認の教理を指して「教会の立ちもし、倒れもする条項」だと言われたりもするのです。

先にも学んだように、要するに信仰義認とは行為義認に対する言葉ですが、その行為義認とは、言ってみれば、人間のよき行為により頼む人間（中心）主義（仏教用語を使えば自力）ということになります。それに対し信仰義認とは、神の救いの約束により頼む神中心主義（つまり他力）ということになります。したがって、信仰義認を表現する言葉として「信仰のみ」というわけですが、内容に即して表現すれば「恵みのみ」ということになります。つまり「信仰のみ」とは、裏を返せば神の「恵みのみ」ということなのです。

さて、こうした信仰義認の論理を更に深く、いわば実感をこめて理解するために、ここでルターの信仰体験を考えてみましょう。ルターはどういう経路を経てこの信仰義認の論理にたどりついたのでしょうか。

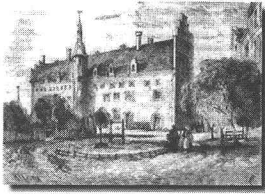
ルターの父親は鉱夫でした。しかし勤勉な彼は大成功をおさめ、後には鉱山の所有者にまでなります。そういう人物が自分の子どもに期待することはただ一つ、自分が果せなかった教育を受け、社会的に立身出世する（具体的にいえば、たとえば宮廷付きの法律家になる）ことです。中世後期のことですから、大学生など数える程しかいないエリートでしたが、ルターは、親の期待通りエルフルト大学の法科の学生となりました。ここまでは全てが順調でした。



ドイツ・シュトゥットゲルトンハイムにある落雷の故事の記念碑

ところが22才の時です。帰省していた親元から大学への徒歩での帰路、シュトゥットゲルトンハイム村の近郊で、ルターは落雷にあいます。あまりの恐ろしさにルターは当然、神に助けを求め、この災難を脱することができたら生涯を神に捧げると誓い祈ったのです。落雷が去ったとき、ルターは大学をやめて修道院に入ることを決心していました。現代人の我々なら、神に祈ったことなどすぐに忘れるかもしれませんが、しかし、中世人の心をもつルターです。彼は自分が神に祈った言葉を忘れてたりできないのです。彼は神との約束に縛られてしまったのです。友人や親の猛反対を押し切って、ルターは修道院に入ってしまった。しかし、ここからルターの内面の闘いが始まるのです。

修道院に入ったものの、ルターの修道院入りの動機にはどこかスッキリしないものがある。神に対する絶対の信頼と愛（つまり信仰）とい



エルフルトの修道院

うよりも、落雷体験による行き掛り上、ひくに引けず修道院入りしたというのが事の真相です。したがって、その修道院での信仰生活にはどこか無理がある。不自然さがただよう。無理と不自然さとは、言ってみれば心の奥深いところでどこか神に対しても自分に対しても納得していないということなのですが、しばしばそうした時、人は過剰に表面を取り繕うものです。と言うわけで、ルターは修道院でむしろ模範的な修道士となりました。他の修道士のだれよりも徹夜の祈祷を繰り返し熱烈に祈ったのです。

しかし、彼の内面は別でした。率直に言って、彼は神を呪っていました。神が恐かったのです。とくに「神の義」という言葉が恐かったのです。なぜならば、「神の義」、すなわち神が義しい方であるとすれば、その神の前に立つわれわれ人間も義しい者でなければならず、義しい行為（よき行為）をして神に義しい者であると認めてもらわねばならない。そこで初めて救われるからです。それゆえ修道士ルターは、せっせとよき行為に努め、熱心に祈ったりするのですが、その動機は、神が恐ろしく、その神に背いたときの罰を恐れていたからなのです。ですからルターにとって「神の義」という言葉は呪わしく、彼はノイローゼのような状態に陥っていました。

さて、そうしたある日、彼は修道院の塔の一室で聖書を読んでいました。パウロの書いた「ローマの信徒への手紙」です。その1章17節の言葉です。すでに何度も読んだはずのところでした。しかし、その日、何かがちがっていました。そこにはこう書いてあります。「神の義

は、その福音の中に啓示される」。ルターにとって大きな声では言えないが、「神の義」は恐ろしく、また呪わしいものでした。ところがパウロが言うには「神の義」は喜ばしい神の音信、つまり福音の中にあらわれるというのです。神の義とは、本来喜ばしいものなのだという。よき行為をしようと思っても本当は十分にできていない、あるいは心のどこかで本当はいやいやながらやっている、だからそういう自分に神は怒っている、だから「神の義」という言葉やよき行為を強いる神を心の底では厭わしく思っていたルターです。ところが、そうではないと書いてある。神は人がよき行為ができなくとも、それでも救ってくださる。無条件の救いとはそういうものです。イエス・キリストが我々人間に代わり十字架の上で罰を受けてくださった、それゆえ人は無条件に救われるとは、そういう意味ではないか。そうであるならば、人はもうよき行為をすることが問題ではなく、ただただそうしてくださる神のみ心にそのまま信頼し感謝し、その無条件の救いを受け入れればよいのではなからうか。まさに福音とはそういうことです。

この「塔の体験」こそが、後のルターの宗教改革運動の原動力となりました。専門用語では「宗教改革的転回」といいます。1517年10月の宗教改革運動が始まる「95箇条」の提示の3年ぐらい前のことであつたと言われています。

修道院の塔の一室で、パウロの言葉を読んでルターはまさに開眼したのです。自分のするよき行為でなく、神の救いのみ心（つまり恵み）こそが全てです。その神のみ心に信頼すればよい。信じればよい。もう不自然で無理な生き方をしなくてもよい。ルターの肩から重荷がスーとおりてゆきました。救いが実感できたのです。このルターの体験のことをふつう「塔の体験」と呼んでいます。

われわれ人間が神に義しい者と認められ救わ



ウィッテンベルクの城教会の扉に「95箇条の堤題」を貼りつけるルター

れるのは、よき行為をするからでなく（つまり行為義認でなく）、神こそが無条件でわれわれ人間を義と認め救ってくださるのであって、人間はその神のみ心（恵み）を受け入れればよい、信じればよいのです。これが信仰義認ということです。人間の（自）力ではなく、神の恵みの力によるのです。それゆえ「恵みのみ」ですし、人はその恵みを信じればよいのですから「信仰のみ」と言えるのです。

信仰義認とはどういうことかについて、ルターの信仰体験を通して考えてきました。「恵みのみ」、「信仰のみ」でした。しかし、最後にもう一つ疑問が残るかもしれません。それは、神の恵みのみ心をただ信じればよい（「信仰のみ」）と言われても、その素直に信じる気持（信仰）はどこからわいてくるのだろうか、という疑問です。ルターはその疑問にも答えています。

人が神を信じること、つまり信仰の力をも、実は神が私たちに与えてくださるというのです。ルターはこういう言い方をしています。「信仰とは、我々のうちに働く神の業であり、かつそうした神の恵みの業に対する我々の断固たる確信である」（『ロマ書序文』より）。

私たちの信仰すらも神の恵みである。そして、そうであるからこそ「信仰のみ」といわれる信仰義認が本当に神の恵みそのものであり、まさに「恵みのみ」と言えるのです。

### 3 信仰義認

神は人間を救済してくださる。結局はこれが神と人間との究極の関係といえますが、この救済ということを分析し、論理化し、表現したものの、それが信仰義認の教理と言えます。そし

て、ルターは、その信仰義認を旗印として宗教改革運動をすすめ、ルーテル教会とは、その信仰義認を自らの最も大切な立場としている教会と言えるでしょう。

しかし考えてみれば、こうした信仰義認の考え方は、何もルターやルーテル教会の専売特許ではありません。先にルターの信仰体験をたどってみて、確かにルターが事改めて信仰義認の考え方を再発見し、教会の教えの中心に据えたのは一つの歴史的事実です。しかし、そもそも信仰義認の考え方は、聖書が、わけてもパウロが力説していたわけですし、アウグスティヌスも説いていたのです。

そうした経緯もふまえつつ、ここでは、全ての土台である1世紀の「聖書」、プロテスタント教会の信仰宣言である16世紀の「**アウグスブルク信仰告白**」、そしてルーテル教会とカトリック教会の歴史的な和解の宣言とも言える20世紀の「**義認の教理に関する共同宣言**」を通して、もう一度、信仰義認について大事な言葉を引用しつつ整理しておきましょう。

## 1) 聖書

聖書には、もちろん信仰義認といったような神学用語が記されているわけではありませんが、内容的には、とりわけパウロ書簡などは、そうした信仰義認の考え方を読者に伝えようとしているとも言えるでしょう。

パウロの言葉から信仰義認について語っている三箇所を引用しておきます。

- 「わたしは福音を恥としない。福音は、ユダヤ人をはじめ、ギリシア人にも、信じる者すべてに救いをもたらす神の力だからで

す。福音には、神の義が啓示されていますが、それは、初めから終わりまで信仰を通して実現されるのです。『正しい者は信仰によって生きる』と書いてあるとおりです。』

ロマ1:16-17

なお義認をめぐる聖書の言葉については「義認の教理に関する共同宣言」の「1. 聖書における義認のメッセージ」に豊富な引用がみられます。

- 「ところが今や、律法とは関係なく、しかも律法と預言者によって立証されて、神の義が示されました。すなわち、イエス・キリストを信じることにより、信じる者すべてに与えられる神の義です。そこには何の差別もありません。人は皆、罪を犯して神の栄光を受けられなくなっていますが、ただキリスト・イエスによる贖いの業を通して、神の恵みにより無償で義とされるのです。』

ロマ3:21-24

- 「事実、あなたがたは、恵みにより、信仰によって救われました。このことは、自らの力によるのではなく、神の賜物です。行いによるものではありません。それは、だれも誇るべきことがないためなのです。』

エフェソ2:8-9

## 2) アウグスブルク信仰告白

1530年、混乱におち入っていたドイツを治めるため、神聖ローマ帝国の皇帝カール5世は、アウグスブルクに帝国議会を召集しました。皇帝自身はカトリック陣営に属していましたが、彼の前でプロテスタント側の信仰表明として読み上げられたものが、「アウグスブルク信仰告白」です。アウグスブルクに立ち入ることができなかったルターと連絡をとりつつ、彼の同労者メランヒトンによって起草されました。

内容は多岐にわたっていますが、その中心はもちろん義認の教えです。信仰義認が「第4条

義認について」で簡潔に次のように述べられています。「われわれは、自らの功績やわざ、つぐないによって罪のゆるしと神のみ前における義を獲得するのではない。むしろ恵みにより、キリストのゆえに、信仰をとおして罪のゆるしを得、神の前に義となる。すなわち、キリストがわれわれのために苦しみを受けたこと、また彼のゆえにわれわれの罪がゆるされ、義と永遠の生命が与えられることを信じる信仰をとおしてである。……」

ところで、先にも考えたことですが、信仰義認の重要な問題の一つが、信仰とよき行為の関係ということでした。つまり、ある人々はこう言うのです。信仰のみを通して救われるのならば、もうよき行為などしなくてもよいわけだと。しかし、これは誤解です。確かによき行為が神の恵み（救済）を引き寄せるのではありません。逆です。神の恵みがその人に信仰を起し、救いをもたらし、そしてこの信仰がよき行為に至らせるのです。つまり、よき行為は信仰の果実なのです。少し乱暴ですが、あえてわかりやすく言えば、「よき行為→恵み（救済）」でなく、「恵み＝信仰→よき行為」なのです。「アウグスブルク信仰告白」では「第20条 信仰とよい行為について」で、次のように述べられています。

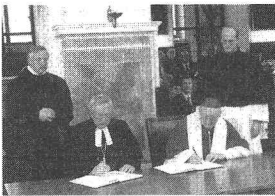
「われわれの行為は、われわれを神と和解させたり、恵みを獲得したりすることはできない。それはむしろ、われわれが、父なる神と和解させる唯一の仲保者であるキリストのゆえに罪がゆるされることを信じる時、その信仰によってのみ生じるのである」。「すなわち、よい行為はなされるべきであるし、なされなくては

ならない。われわれが、それによって恵みを獲得するようにそれに依存するからではなくて、神のみ旨を行ない、また神をほめたたえるためである。つねに信仰だけが、恵みと罪のゆるしを把握するのである。そして、信仰によって聖霊が与えられるときに、心はよい行為をするように動かされる」。

### 3) 義認の教理に関する共同宣言

20世紀も終ろうとしていた1999年、教会史上たいへん大きな出来事が起こりました。キリスト教は16世紀の宗教改革運動によって、カトリック教会とプロテスタント教会とに大きく分裂していました。500年にも渡る分裂です。しかし、20世紀も半ばすぎ、カトリック教会の第2ヴァチカン公会議によって両者の和解の歩みが始まり、そして20世紀の終りに両者にとって(とりわけカトリック教会とルーテル教会にとって)最大の教理上の論争点であった「義認」、つまり救いの問題をめぐって大きな合意に至ったのです。ルーテル世界連盟とローマ・カトリック教会の間で調印された「義認の教理に関する共同宣言」がそれです。

この共同宣言の意義はどこにあるのでしょうか。手短かに三点あげておきましょう。第一点は、義認をめぐって、両者の間に**基本的な合意と相互理解ができた**のです。このことは、どれほど強調しても強調しすぎることはありません。もう義認をめぐって相互に断罪しあうことはなくなったのです。つまり、両者を隔てる最大の壁はなくなりました。第二点は、基本的に合意したということは、逆に両者の間の幾つかの見解の**相違が整理できた**ということです(共



ルーテル教会とローマ・カトリック教会代表による調印式



同宣言には神学の専門的見地から7つの論点が検討されています。なかでも「罪」をどう理解するのかなどをめぐって相違点があります)。違いがお互いに整理できたということは、むしろその相違の克服にむかって、両者が協力できるということです(言うまでもありませんが、両者の間に基本的合意ができたということは、それがすぐに両教会間の組織的制度的な合同ということではありません。500年に亘って分裂してきたのです。ですから今後、無理なくゆっくりと協力関係をおし進め、そしていつの日か完全に一つの教会となるのでしょう)。第三点は、義認をめぐって両者の間に共有できる基本的真理と、そして幾つかの二次的な相違が整理できたということは、両教会にとって、自分たちの教会の伝統や考えが改めて**自己理解**できたということです。一体、私たちルーテル教会とはどういう教会なのか、ということが改めて私たち自身によく理解できるようになったということです。

さて、こうした画期的な共同宣言の中から、中心となる総括的文章を引用し、義認についての私たちの学びを再度まとめておくことにしましょう。中心となる総括的文章とは、共同宣言の第15項の次の文章です。

「われわれは共にこう告白する。われわれは、われわれの側のいかなる功績によってでもなく、恵みによってのみ、キリストの救いのみ業への信仰において、神に受け入れられ、聖霊を受ける。この聖霊がわれわれの心を新たにし、それによってよい行いへとわれわれに力を与え、召し出す」。

すばらしい文章です。ここには、私たちが今

まで信仰義認について学んできた大切な事柄が過不足なく簡潔にまとめられています。次の三点です。①義認は、信仰において、神の恵みによってのみ起る。まさに信仰義認です。②義認とは、神に受け入れられ（罪のゆるし）、かつ聖霊を受けることである（聖霊により心を新しくされる）。③義認の実として、われわれはよき行為ができる。

信仰義認という考え方は、16世紀に改めてルターが再発見し、やがて全プロテスタントの共通の旗印となりました。そして、今やカトリック教会をも含めて、キリスト教の全てにとって最も大切な教理であると言ってよいでしょう。しかし、それは考えてみればあまりにも当然のこととも言えます。なぜなら、そもそも聖書が、まさに信仰義認の教えこそを私たちに力をこめて語っていたと言えるからです。そこで、今や私たちは、心の底から確信を持って言うことができるでしょう。「恵みのみ」「信仰のみ」と。

**4 今日における意味** 信仰義認の教えが、キリスト教の「教理」の要にあることがわかりました。

しかし、この信仰義認の考え方は今日更にその重要性を増しているとも言えます。と言うのは、私たちの世界では、人間どうしの間で差別や格差、つまり人間の間には価値づけがなされ優劣をつけることを当然とするような社会になっているからです。人はあるときは能力によって、あるときは業績によって、あるときは出身によって、あるときは学歴によって、あるときは貧富によって、あるときは美しさや体力によ

ってなどなど……ともかく、人間の間はその人がなんらかの能力や業績があることによって価値づけがなされています。ここから、深刻な差別や疎外が生まれています。そして、この差別や疎外が、人を苦しめ生きづらくしているのです。

しかし、神は私たち人間を能力や行為によって測られません。神が人間の罪をゆるし、義と認めてくださる（義認＝救済！）のは、ただひたすら神のあわれみ深い**恵み**なのです。人間の行為や能力ではありません。恵みのみなのです。だから、その恵みを私たちは感謝をもって受け入れる（信仰）のです。そして、結局これが信仰義認の教理のいいたいことなのです。ですから、今日ますますこの「義認の教理」は、その真理の輝きを増していると言えるのです。

#### 〈話し合いのために〉

- ①ルーテル教会の特徴は何だと思いますか。
- ②ルターが悩み、迷い、発見したものは何でしょうか。
- ③「信仰義認」の考え方は私たちの周りの様々な社会問題に対して、どのような解答をもたらしますか。

## ルーテル教会の信条一覧

使徒信条	<p>基本信条の中で最も古い起源を持っている。2世紀後半から「信仰の基準」あるいは、洗礼の際の信仰告白として用いられてきた。現在の形になったのは8世紀。内容は、三位一体論、キリスト論が中心であり、最も広く礼拝で用いられている。</p>
ニケア信条	<p>451年に公会議で再確認され、正しくはニケア・コンスタンティノポリス信条と呼ばれる。キリスト教がローマ皇帝により公認されたことにより、教会の中で「異なる福音」との対決が必要であった。325年にニケア公会議が開催され、その後126年かけてほぼ現在の形ができた。</p>
<p>アタナシウス信条</p> <p>(以下ルーテル教会固有の信条) アウグスブルク信仰告白</p>	<p>西方教会で5～6世紀にできたと考えられている。構成は40条あり、全体として詩の形を成しているが大変教理的である。325年のニケア公会議から451年のカルケドン公会議までの会議での決定の優れた要約となっている。</p> <p>アウグスブルク信仰告白は、ルーテル教会の基本的告白であるばかりでなく、宗教改革の教会によって公にされた最初の信仰告白である（1530年）。以下本文41頁参照。</p>
アウグスブルク信仰告白の弁証	<p>皇帝カール五世は、アウグスブルク信仰告白に対する「論駁書」をローマ・カトリックの神学者に書かせた。それに対してメラニトンが弁証を書いて出版した（1531年）。弁証は、アウグスブルク信仰告白の弁護また解説である。</p>
シュマルカルデン条項	<p>教皇パウロ三世がマントヴァで公会議の開催を召集した（実際は延期）。それに備えてルター自身が書いた教理である（1537年）。内容は、三部構成で、何を受け入れたり、譲ったりできるか、できないかを示すキリスト教教理の条項である。</p>
大教理問答 小教理問答	<p>一般の教会生活、信仰生活の実態を検討するために巡察を行った。結果は信徒も牧師もまことにひどい状態であった。そこでルター自身が教理問答を書いた（1529年）。小教理問答は、全ての人の信仰教育の材料として主に家庭で用いられ、大教理問答は、その内容についての教理問答説教として書かれた。</p>
和協信条	<p>ルター没後（1546年）政治的にも神学的にも揺れ動いた。1555年にアウグスブルク宗教和議が結ばれカトリック教会とアウグスブルク信仰告白に基づく教会とが共存を許された。しかし、福音主義陣営の中では、いろいろ神学論争が起こった。ザクセン選帝候による神学者たちの会合斡旋等を経て、1577年ようやく和協信条が成立した。1580年に9つの信条によりルーテル教会の一致信条書が完成した。</p>

## 江口再起

1947年生まれ。独協大学、日本ルーテル神学大学・神学校卒、ドイツ、エルランゲン大学神学部に留学。日本福音ルーテル博多、藤が丘教会牧師を歴任。現在、東京女子大学教授。ルーテル学院大学・日本ルーテル神学校非常勤講師。同ルター研究所員。日本ルター学会専務理事。

---

# LAOS 講座 第3号 真理を求めて

—キリスト教の教理と信条—

- 発行日 2006年5月1日  
編集者 PM21 第2プロジェクト「証し・奉仕する信徒」委員会  
委員長 齋藤未理子  
著者 江口再起  
発行者 「日本福音ルーテル教会宣教方策21」(PM21) 推進委員会  
宣教室長 推進委員長 徳弘浩隆  
発行所 日本福音ルーテル教会 宣教室  
印刷所 精文堂印刷株式会社
-



